

研究課題：『種子島スタディ』-口腔から種子島地域高齢者の健康寿命延伸につなげる包括的高齢者機能評価-

研究者名：鈴木 甫，吉村卓也，手塚征宏，中村典史

所 属：鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 口腔顎顔面外科学分野

【目的】鹿児島県は全国一の離島人口を抱える。代表的な離島の一つである種子島・西之表市は高齢化率が35.8%に達し、全国に先駆けた超高齢社会を反映している。西之表市高齢者等実態調査によると、在住高齢者の8割弱が定期的な歯科検診を受診しておらず、介護予防での取り組みとして「口腔機能向上に関する事業」を希望した高齢者の割合が約12%程度に留まっており、高齢者における口腔への関心の低さ・口腔機能低下(オーラルフレイル)予防の重要性の認識不足が問題点として浮かび上がった。そこで我々は、西之表市と協議を重ね、鹿児島大学と西之表市(八板俊輔市長)との共同研究契約を締結し、西之表市地域高齢者の口腔機能のみならず、身体機能、運動機能、および社会性の評価を加えた包括的機能評価を行い、高齢者の現状把握と問題点抽出を目的に本研究を行った。

【対象および方法】西之表市地域介護予防活動支援事業に参加登録している自立高齢者：約700名(介護予防拠点計47地区)のうち、本研究への参加同意を得られたものを対象とした。介護予防拠点に研究班が出向き、参加者に対して、総合的機能評価を実施し、下記について解析を行った：1)年齢と歯の本数(咬合力)、口腔衛生状態(口腔不潔)、口腔湿潤度(口腔乾燥)、舌圧、咀嚼力、および口腔機能低下(該当した項目数)の相関関係、2)舌・口唇運動機能低下の有無と年齢の差、および嚥下障害の有無と年齢の差、3)オーラルフレイルの有無と各因子との関連性についての単変量および多変量解析。

【結果および考察】得られた参加者は、計27地区、総計401名(男性87名、女性314名)であった。平均年齢は78.3±7.3歳(最年長101歳、最年少56歳)であった。口腔機能のうち、舌・口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能、嚥下機能に年齢とともに悪化が認められた。口腔機能低下の該当項目数は、年齢とともに増加しており、高齢者においても一律の対応ではなく、世代に合わせた口腔機能低下対策が必要である可能性が示唆された。口腔機能低下群では、フレイルに深く関与する全身の筋力低下(サルコペニア)、運動機能低下(ロコモティブシンドローム)が認められていた。また、フレイルの程度の悪化が口腔機能低下の悪化と深く関連していた。多変量解析の結果、オーラルフレイルの有無と年齢、歩行速度、GOHAI、そして豆類または卵を毎週2品以上食べる、は有意な関連が認められた。今回の解析では、オーラルフレイルのリスク因子として、運動機能面・栄養面・口腔環境のいずれの因子も深く関わっている可能性が示唆されたため、今後さらなる参加者の追加と解析が必要である。今後本研究は、医学的な見地のみならず、地域学や都市デザイン学の観点からも西之表市と共同で解析を進め、「健康寿命延伸」に寄与する因子の同定と、適切な介入方法を考案し、2020年度以降の追跡調査へと発展させていく予定である。